とどけ夢 未来へ
-DREAMING-

慶野 尚子（たかこ） さん

●吾妻中学校３年

夢を叶えるために

私の夢は、看護師になることです。

「人の役に立つ仕事がしたい」という思いがあり、そんな時、病院で医師のサポートをしている優しく頼もしい看護師さんに出会ったのがきっかけです。看護師の仕事に必要なことは、「コミュニケーション力」だと思います。

私は、たくさんの人と接する中で、徐々にコミュニケーションに自信がもてるようになってきました。これからも、もっと積極的に人と接し、勉強も頑張って、患者さんに好かれる明るい看護師を目指したいです。

みんなの広場

佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からのメッセージ

めっきり涼しくなり、日足も短くなってきました。市民の皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

先月９日から10日にかけて、台風18号の影響による大雨により、本県をはじめ各地で甚大な被害がありました。本市でも三杉川の左岸決壊や土砂災害などがありましたが、幸いなことに人的被害もなく大変安堵しました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

さて、先月、市民のスポーツの祭典である市民体育祭が運動公園などで開催され、多くの市民が地域の代表として参加し汗を流しました。大会準備に携わった体協各支部の皆さん、また円滑な大会進行に尽力いただいた競技役員の皆さんのサポートに、心から感謝とお礼を申し上げます。

また、先月から各地域で敬老会が開催されています。本年度、本市で１００歳を迎えられる方は男性１名・女性20名であり、１００歳以上の方は総勢61名で、最高齢者は１０６歳の女性の方です。私も時間の許す限り敬老会に出席し皆さんの元気な姿を拝見していますが、長寿の秘訣はやはり「笑顔」だなとつくづく感じます。皆さんにはこれからも笑顔でお元気にお過ごしいただきたいと思います。

それから、第２次佐野市訪英団ですが、先月18日から23日までの４泊６日でロンドンに行ってきました。国際クリケット評議会や「マリルボーンクリケットクラブ」の役員の方々と交流を深めてきました。これを機に、さらにクリケットによるまちづくりを推進してまいります。

実りの秋です。これからそば祭りや秋祭りがあちこちで開かれますが、夏の疲れを癒やしつつ、皆さんもスポーツ、読書、旅行など秋本番を楽しんでください。

岡部 正英

今回の表紙「第１１回佐野市民体育祭」（陸上競技）９月１３日（日）運動公園陸上競技場

延べ５，０００人もの選手が参加し開催された市民体育祭では、陸上部門・総合部門それぞれで赤見地区が優勝しました。

各地区を代表する選手として子どもから大人まで参加し、世代を超えてスポーツを競い・楽しみました。

キラリ★話題の「ひと」

相子 江里子さん
（栃本町）

○プロフィール
子どもの頃から本が好きで、図書館司書の免許を取得する。
転居先の小山市で「読み聞かせ」の活動に出会い、現在、読み聞かせのボランティア「おはなしの木」で活躍中。

本に触れる活動

相子さんは子どものころから本が大好きで、家にあった「少年少女全集」や図鑑、図書館の本を読むのが楽しくてたまらなかったそうです。

ご主人の勤務の関係で小山に転居した際、お子さんの通う小学校で読み聞かせの活動に出会い、その魅力や意義を感じ、活動に参加するようになりました。その後、田沼に戻ってから、読み聞かせのボランティア「おはなしの木」の活動に参加しています。

「おはなしの木」の活動は田沼小学校で行われています。1年生から4年生を対象に年に2・3回程度と「読書週間」のスペシャルとして1度の計3・4回。5・6年生では進級や卒業前に1回、学級ごとに読み聞かせを行っています。

読み聞かせは読み手が椅子に座り子どもたちの目線になり、子どもたちは読み手を囲んで座り、お話を聞くという形です。中には、主人公にすっかり気持ちを移入する子もいるとのことです。インターネット、テレビなどの情報過剰な時代だからこそ、本や読書のもたらす意味も大きく、読書の喜びを知る子どもたちが増えて行けばいいなと思います。

相子さんはまた、生後9か月の乳幼児健診の場での「ブックスタート」という絵本に接する企画や、8月に市内の保育園で行われる「非核平和推進事業」のお話の会でも活動しています。今の時代、こうした相子さんたちのような活動も大切になってくると思います。

10月になりました。秋といえば「読書の秋」ともいいます。ぜひ皆さんも本に触れてみてください。

（市民記者　福田満）

子どもたちの目線の高さで、読み聞かせをする相子さん

佐野弁 ばんざい

気前がいいことを、オッキリガイーという

金銭などを惜しみなくつかったり、食べ物などを気前よくおごったりする人を、物わかりがよくて「気前（がいい）」人だとか、「切れる」人だなどといいます。この「切れる」から、方言のオッキリ（「気前」の意）が生まれました。

「あの中年男性はだいぶハデッキ（派手）なようだけど、オッキリもいいンだってね。みんなによくおごってくれるンだってガネ（よ）」

この反対に、金品など出し惜しむことを、しぶい（渋）といい、そのような人（こと）をしみったれといいます。これが訛（なま）って、方言ではシビッタレといいます。タレは人を悪くいうときに付けることばです。

しぶいの外に、しわい（吝）があります。この「しわい」が、けちん坊という意のシヤ（シア）になり、「やつはシヤだから、ろくなもンも食ってネーっていううわさだよ」などといいます。さらにけちん坊を少し強めていうときには、シアッケツ（シヤッケツ）・シヤンボ（シアンボ）などといいます。

「生活ニャー（には）困ってネーンだけど、シアッケツだら出すべきもンも出さネダンベ。アスビ（遊び）にさそってもイガ（行か）ネンだってよ」

金品など出ししぶる人を、俗っぽい言い方（方言）では、ケツッツマリといいます。尻（けつ）の穴から、出すべき物を出し惜しむほどけちだという意味です。「切れる」「しわい」に関する方言は、今でも中高年の多くの人たちが使っています。

（市民記者　森下喜一）